
【Marble～触れられない物～】

こもれび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【Marble～触れられない物～】

【ZPDF】

Z9082D

【作者名】

こもれび

【あらすじ】

触れられないから触れてみたい。触れられないから美しい・・・

・

「おい。ブラ透けてんぞ、お前」

飽きもせぬ夏を曇くする太陽の元、隣を歩く優のカッターシャツは薄く汗ばんだ肌に張り付いていた。

「つっさこわね、暑いから仕方ないでしちうが。あんまり見てる
とお金とるわよ」

「こつちのセコフだ。迷惑料欲しいくらこだよ」

なにをつーと、拳を振り上げて追いかけてくる優から、慌てて逃げ出す。

高校二年の夏。

幼なじみの俺と優は、二人仲良く補習を受けることとなつた。

今はその帰り道。

補習は午前で終わりなので、まだ外は明るく、茹だるような熱に包まれてゐる。

「それにしても、青春真っ盛りのこの時期に補習なんて……最悪よね」

「まつたくだ。夏休みまで数学の山田の顔見ゆことになるなんて、思つてもみなかつたよ」

沸き立つ蝉の鳴き声に負けないくらい大きなため息が、汗とともにこぼれた。

俺も優も、カツターシャツの襟口をパタバタと仰いでいた。

優と過ごして来た時間は、そのまま年齢と同じだ。
生まれてから今まで腐れ縁は続いている。

お互いあまのじやくな性格で、いつも口喧嘩ばかりしているけど、それは不器用な俺達のコミュニケーションのようなものだ。

『友達以上恋人未満』

この言葉が、今の一二人を上手く表現している。

つかず離れずの関係だったけど、この夏、何かが変わったような予感がしていた。

それはきっと優も同じだと思つ。

「あ、もう堪らない！…ねつ、久しぶりにあそいだり

いきなり声を張り上げたかと思つと、俺の手を取り、入り組んだ下町の狭い路地を駆け出した。

「お、おこつーあそいだよー。」

「いーからいーから

耳元の風を切る音。

移り変わつていく景色。

額から滲み出した汗は、頬を伝つて後ろへと流れしていく。

右に曲がって、左に曲がつて……段差の低い階段を昇つていく。

あ……この道つて。

辿つてこる道の行き先を思に出したのと同時に

「到着～」

優の掛け声が聞こえ、目的に到着していた。

優は、はあつーと大きく息を吐くと、それだけで息を整えてしまつ。俺はこうと、隣でみつともなく呼吸を乱していた。

「…………」

「そつー昔よく来てた駄菓子屋なんだよ」

まだ物心つく前、今日みたいな夏の日も、珍しく降った雪の日も通つた駄菓子屋……。

外觀はある頃と向の変わりも無く、騒がしい喧騒から隔絶された、秘密基地のような雰囲気を今もしつかりと保つている。

強い陽射しとのコントラストで、日陰はやけにくつきつと浮かんでいた。

「ホント久々だよね～。おばあちゃん、まだ元気にしてるかな?」

「ああ。あのガンゴばあちゃんか……少つきこ頃よく拳銃食いつてたよ」

後少しある駄菓子屋への道を、一人肩を並べて歩いて行く。

最後に行つてから……もつ何年経つだろつか。

普段実感は無いけど、いつも風にたまに過去を振り返つたりする

と、歩いて来た道程が良くわかる。

意識せずとも、時間は流れいくものなのだと改めて実感した。

俺と優の関係も同じ様に

「すいませ～ん！誰かいらっしゃいますか～？」

人気のない店内に呼びかける、優の声でハツとする。眩しい光りを受けていたせいか、薄暗い店の中でやたら目がチカチカした。

「誰もいねえ～のかな？」

景品のスーパー ボールを手に取りながらぼやく。指先に触れたソレは、少しだけ埃を被つていた。

すいませ～ん！と、先程より大きな声で優が呼びかけた時……

「はいはいは～い！」

と、やけに元気な声が奥から聞こえて来た。

予想外の声に、二人して顔を見合わせる。

しばらくすると奥の障子が開き、若い女人人が現れた。

「いらっしゃい。何にする?」

年は「十台後半くらいだろうか……顔には、『あの』頑固ばあちゃんの面影がうつすらと残っていた。

たぶんばあちゃんのお孫さんだろう。

「あ、あのっ。おばあちゃん、びっくりしたんですか?」

少し慌てたように優が尋ねると、女人人は明るい表情に少し暗い影を落とす。

「おばあちゃんね……去年病氣で亡くなつたのよ

告げられたのは、残酷な現実と、俺達の知らない所で流れていた時間の結果だった。

「や、ですか

優は肩を落とし、何とかそつと話した。

でも信じられない。

あんなに元気だったばあちゃんが……。

「お店、畠もうかと譲つてたんだけど、おばあちゃんが『閉めな

いで』つて最後まで言つてたから。……日曜だけ開く」としているの

儲けなんて無いんだけどね。

と、少し悲しそうな笑顔を浮かべた。

夏休みと補習のせいで曜日の感覚が無くなっていたけど、偶然今日は日曜日だったらしい。

「懐かしい話とかもあるでしようから、何を買うか決まつたら呼んでちょうだい。想い出だけ買ってても構わないから」

お孫さんはそう言つと、笑みを浮かべながら再び障子の奥へと戻つていった。

こちらの様子を察して、気を使つてくれたのだひつ。

「……」

「……」

ただでさえひつそりとした店内で、しばらく一人の沈黙が続いた。

.....
.....
.....

「ばあちゃん……あんなに元気だったのにな……」

「うん……」

それ以上の会話は無く、結局ラムネを2本買って駄菓子屋を後にした。

来る時は変わっていないと思っていたけど、帰り際改めて見てみると、ばあちゃんが居ないだけで、駄菓子屋は何だか全然知らない場所のように田舎だった。

†

「知らないトコで、時間つて流れてるんだな」

駄菓子屋から少し離れた公園。

優と二人、ブランコに乗つてラムネを飲んだ。

「そだね……。考えてみれば、あんなに小さかったアタシ達が、
もう『高校生』なんだもんね」

「……」

優はあちゃんの死を、珍しく引きずつている。

そんな優の顔を見たくなくて、俺はある事を思いついた。

「トトー」

……つと、掛け声一つ、ブランコから飛び降りると

「一氣こきま～す……」を合図に、腰に手をあて、まだ半分以上残つてこるラムネを一氣に飲み干す。

「ふはあつー。」

案の定、飲み干したすぐ後に、思つてきり吹き出しちゃつた。

「も～、アンタ何やつてんのよ。」

ケラケラと、優はいつも通りの笑顔を浮かべてくれる。

知らないところで時間が流れしていくのは仕方の無いことだけど、俺はこれから時間も、優とこんな風に生きていきたいと思った。

「昔の話で思い出したんだけど、アタシこのラムネのビー玉がすっごく欲しかったんだ」

ひとしきり笑い合つた後、そつまつて、優はブランコに乗つたままラムネの瓶を太陽に透かした。

瓶にビー玉が当たる音が“チリン”と鳴つた。

「あ～。たしかに、一度は思つよな、それ」

「ちっがうよ！アタシはそんなんじゃなくて、ホントにハイパー
欲しかったの！..」両の手で握り拳を作り、それをブンブン振つて
力説する。

瓶を割つてしまえばそんなもの簡単に手に入るのだけど、小さいころは『ガラスを割る』ということはとても恐ろしい事で、ラムネの中で光るビー玉は、確かに、まるで手の届かない宝石のようだった。

光り物が好きなあの頃の女の子なら尚更たゞ

その時、ラムネの瓶が昔と違うことに気付いた。

「おい優、みてみろよ！」

「ん？」

ズイッと、こちらの手を覗き込んでくる。

このラムネの瓶は、昔と違ひ飲み口がプラスチックで出来ており、そこだけ取り外しが出来るようになっていた。

取り出したビー玉を、優の手のひらに乗せてあげる。

「わあ～！」

それをひょいと摘むと、わっせと同じように太陽に透かす。
弾ける笑顔は、小さい頃のままだつた。 だけじしばりくすると……

浮かない顔でビー玉を俺に突き返して來た。

「どうしたんだよ。 欲しかつたんじゃないのか？」

「ん~。ずっと欲しかつたんだけどね、ホント」。でも、瓶の方……触れないほうが、何だか綺麗に見えたから

どこか悲しそうな顔で、優はそいつひつ。

「そ、そつか……」

触れそうで触れない物。

触れないから欲しい物。

触れないから綺麗な物。

そう、それはまるで俺達の関係のようだ。

てのひらに包まれていてビーチ玉が手に冷たく、重く感じる。

居たまれなくなつて、ビーチ玉を瓶に戻そうとしたけど、うまくいってなかつた。

優は隣で、寂しそうな顔のまま、遠くを見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9082d/>

【Marble～触れられない物～】

2010年12月29日11時40分発行